

21 世紀の課題とチュチェ思想

アジア・チュチェ思想研究所理事長
ムケシュ・シャルマ

ご来賓のみなさん、ご列席のみなさん、報道関係者のみなさん

みなさんの前で報告する重責を感じながら、本日、「21 世紀の課題とチュチェ思想」というテーマについてお話しできますことを、わたしは、たいへん光栄に思います。

21 世紀は、これまでの歴史の単なる延長線上にあるものではありません。21 世紀は、数々の矛盾が激しく衝突する時代であり、均衡が保たれぬや、人類の運命が激しく揺さぶられる時代です。生態系が崩壊し、経済的搾取が強まっています。帝国主義によって引き起こされる戦争が世界的におこり、帝国主義の文化的浸透が前世紀にもまして進行しています。

生態系の崩壊、経済的搾取、帝国主義の侵略と文化的浸透の深刻化—これらの問題は、個別に起きているのではなく、支配や不平等、精神的荒廃が進行している世界体制が生み出した、複合的かつ構造的な危機なのです。一つの超大国が他の弱小国を抑圧しようとしており、世界のいたるところで戦争が勃発しているこんにちの状況を、いまや知らない人はいません。

これらの問題は、どこからかおのずと生じたものではありません。地域住民の利益よりも海外資本の利益を優先し、国と民族の尊厳を踏みにじり、他国に従属を強い、人命よりも自己の利潤を追求する—こうした非人道的な世界秩序によってもたらされた人為的な危機なのです。

そして今、わたしたちは歴史の重大な岐路に立っています。この暗いトンネルから抜け出すために、わたしたちは問いかけなければなりません。人類に未来を取り戻す力を与えてくれる哲学とは何か。人類を最終的に平和、進歩と繁栄の道へと導いてくれる哲学とは何かと。

その答えは、自力更生、自主、人間本位の思想であるチュチェ思想にあります。チュチェ思想は、金日成主席によって創始され、金正日総書記によって継承・深化され、そして、金正恩総書記によってさらに発展豊富化されました。金正恩総書記は、各国が、その国の運命の主体であり、大衆はたんなる随員ではなく、歴史の創造者であると強調しています。

I. 帝国主義とその世界支配

世界はいま、地政学的危機のただ中にあります。

こんにち、世界は依然として平和とは言えません。現在の世界は、米国とその同盟国が主導する帝国主義勢力の支配下にあります。これらの帝国主義勢力は、「人権」「民主主義」「安全保障」の看板を掲げながら、主権国家の内政に干渉しています。しかし、これらの言葉は、他国にたいする支配や政権転覆、略奪行為を正当化するために、人々を心理的に惑わす道具以外のなにものでもありません。

イラク、リビア、シリア、アフガニスタンなど、「自由」の名の下に、どれだけの国々が崩壊させられてきたのでしょうか。いわゆる民主主義国家が他国の資源を略奪し、他国に自らの意志を押しつけるなかで、どれだけ多くの人々が避難民となり、飢えに苦しみ、命を落としたことでしょうか。

チュチェ思想は、政治的自主こそが、あらゆる自立の基礎であると説いています。主権がなければ、平和も、国と民族の尊厳も、真の発展もありません。だからこそ、チュチェ思想の旗じるしのもと、朝鮮民主主義人民共和国(以下朝鮮)は、戦争や制裁、孤立といった外的圧力に対して、決して屈することはありませんでした。朝鮮人民は、主権を奪われれば、すべてを失うことがわかっていたからです。

II. 新植民地主義と経済的従属

現代の世界経済では、依然として新植民地主義的従属関係が続いています。発展途上国、とりわけアフリカ、ラテンアメリカ、そしてアジアの一部の国々は、依然として国際金融資本と多国籍企業の強い影響下に置かれています。IMF(国際通貨基金)と世界銀行は「開発援助」を装いながら、債務国に緊縮財政や民営化を強要し、返済不能な借金を積み重ねさせることで、抜け出られなくなる債務の罠を仕掛けています。そして、民衆によって生み出された財貨は民衆の手には渡ることなく、上層部へと吸い上げられ、外国に流れていくように仕向けられています。

チュチェ思想は、国際金融資本が主導するこのような「開発」モデルを、断固と拒否します。チュチェ思想は、外から押し付けられる「開発」を良しとしませ

ん。チュチェ思想は、自国の資源、自国人民の力、自国の技術力、そして強力な指導のもとで、自国の経済を発展させていかなければならないと強調しています。そうしてこそ、国は自主性を擁護でき、自国人民の生活水準を持続的に向上させていくことができると明らかにしています。

朝鮮は、数十年にわたる帝国主義勢力の制裁と圧力をうけてきましたが、こんにちでは金正恩総書記の指導のもと、勤勉な人民が強い意志と自信をもって、工業、農業、科学を発展させています。逆境に屈するのではなく、抗って大きな成果を達成する、これが朝鮮人民のたたかいの在り方です。利潤に飢えた巨大金融資本が支配する世界において、朝鮮人民は、経済においても自己の主権を確固と堅持しています。

III. 帝国主義の文化的浸透と民族性の危機

現代において、目に見えにくく、同様に深刻な脅威として挙げられるもう一つが帝国主義の文化的浸透です。外国の支配勢力は、他国の領土と資源の征服にとどまらず、その国の人民の心、特に若者の心までも支配しようとしています。このような支配勢力はマスメディアやそのプロパガンダ、消費文化を通して、その国に個人主義、物質万能主義の価値観をはびこらせます。そして、民衆のなかに息づく伝統や歴史、互いに助け合う良風美俗を否定し、それらとは切り離された根なし草のような「世界市民的価値観」を浸透させていきます。

チュチェ思想は、自国の文化や言語、慣習や歴史を守り、発展させることの重要性を強調しています。これらは決して過去の遺物ではなく、人民の精神力を培養させていくうえで決定的に重要な源泉となります。自己の民族性を喪失した人たちは、いとも簡単に奴隷の境遇に貶められていきます。チュチェ思想は、どの国にも、自国人民を自己の民族性や歴史を誇れる人として育成していく権利があると言明しています。

IV. 資本主義の道徳的退廃がもたらす環境破壊

わたしたちはいま、おそらく最大の脅威、すなわち生態系が崩壊するという脅威に直面しています。気候変動、生物絶滅の危機、そして空気、水、土壌の汚染は、人類の生命そのものを脅かしています。しかし、この危機の原因は、たんな

る大量の二酸化炭素の排出にあるのではなく、資本主義そのものにあります。飽くなき利潤追求、目的なき生産、そして自然にたいする際限のない搾取が、人類を破滅の淵に追いやりました。

人間本位のチュチェ思想は、計画経済と人間による責任ある管理を通じて、人間と自然との新たな調和をきずく道を提示しています。わたしたちがめざす経済活動は、利潤追求の経済活動ではなく、民衆の幸福と未来の世代のための環境保全を指針とするものでなければなりません。これは、富裕層による慈善事業に依存するものではなく、世界秩序の抜本的な再構築を求めるものです。

V. 革命の主人としての民衆の役割

同志のみなさん

これらのたたかひの根底には、一つの真理があります。それは、民衆こそが歴史をきりひらく決定的な力量であるということです。チュチェ思想は、エリート官僚、市場経済、あるいは外国勢力が植民地統治からの解放をもたらすという考えを否定しています。チュチェ思想は、民衆が自らの役割を自覚し、団結し、自主の思想で武装してこそ、人類がいま直面している危機を乗り越えることができるかと明らかにしています。

現時代は服従の時代ではなく、民衆を目覚めさせ、立ち上がらせていく時代です。いまは絶望するときではなく、まさに行動を起こすときです。

わたしたちは、ただこんにちの世界における問題を議論するために、ここに集まったのではありません。わたしたちは実践し、こんにちの状況に立ち向かわなければなりません。歴史の重責を託されたわたしたちにとって、わたしたちの目の前にある課題は計り知れないものです。しかし、問題を解決するわたしたち自身の可能性もまた計り知れないものです。わたしたちがチュチェ思想を堅持する限り、その可能性は確かなものとなります。

1. わたしたちは、困難に耐えるだけでなく、困難を克服していくだろう。
2. わたしたちは、破壊策動を阻止し、主権を固守していくであろう。
3. わたしたちは、服従を拒否し、ゆるぎない繁栄を実現していくだろう。
4. わたしたちは、自らの力で平和を守っていくだろう。
5. わたしたちは、尊厳ある自主権を行使する自らの模範の構築を通して、

世界を鼓舞していくであろう。

結び

21 世紀における諸問題は相互に関連しあっており、もはや断片的な対策では立ち向かうことができません。今こそ、人間の尊厳と自主性を軸とした、一貫した思想的指針にもとづく対応が求められています。チュチェ思想は、特定の地域に限定された思想でも、時代遅れの思想でもありません。チュチェ思想は、尊厳をもって生きたいと願うすべての人々、支配されることを拒むすべての国家、そして人間は自己の運命の主人であると信じるすべての人々のための、革命思想です。

わたしたちは、帝国主義が支配する世界に、自主性のかかげて立ち向かいましょう。

わたしたちは、搾取が横行する世界で、自力更生の精神のかかげて立ち向かっていきましょう。

わたしたちは、絶望に対して思想の力をもって立ち向かいましょう。

わたしたちは、チュチェ思想の道一すなわち、自尊、団結、そして民衆への揺るぎない信頼の道一を歩むとき、初めて現時代の暗闇を乗り越え、人類の未来をさし示すことができるのです。